

関西学院大学 研究成果報告

2018年 5月 3日

関西学院大学 学長殿

所属：文学研究科
職名：博士研究員
氏名：小林正法

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input type="checkbox"/> 特別研究期間 <input type="checkbox"/> 自由研究期間 <input type="checkbox"/> 大学共同研究 <input type="checkbox"/> 個人特別研究費 <input checked="" type="checkbox"/> 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	情動概念の再構築：心理学の新たな挑戦
研究実施場所	応用心理科学研究センター（全学共用棟3F）
研究期間	2017年 4月 1日 ～ 2018年 3月 31日（ 12ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

2017年度では、研究課題に広く関わる研究として4つの研究を行った。

まず、1つ目の研究として、ノスタルジアに関する研究を行った。ノスタルジアは“過去に対する、感傷的な思慕または哀愁的な愛着”として定義されている（e.g., Wildschut, Sedikides, Arndt, & Routledge, 2006）。ノスタルジアはポジティブ感情とネガティブ感情の両方を含むという複合感情（mixed emotion）という特徴を持つため、その詳細を明らかにすることは感情研究において重要である。ノスタルジアは、懐かしい音楽聴取や懐かしい記憶の想起によって実験的に喚起することができる。これまでの研究から、ノスタルジアを実験的に喚起した場合には、外集団（精神疾患患者など）への肯定的な態度が促進されることが明らかにされてきた（e.g., Tuner, Wildschut, Sedikides, & Gheorghiu, 2012）。これを受け、複合感情の社会的機能に関する示唆を得るべく、本研究では外国人顔の評価にノスタルジアが影響するかを調べた。そこで、ノスタルジアを実験的に喚起することで顔の信頼性評価が変化するかどうかを実験によって検討した。実験の結果、音楽聴取によってノスタルジアを喚起した場合には、ノスタルジアを喚起しない場合（統制条件）と比べて、顔の信頼性が高く評価されることが明らかになった。この背景には、ノスタルジアの喚起によって社会的繋がり（social connectedness）の知覚が高まったためだと考えられる。本成果はInternational Meeting for the Psychonomic Society Meetingにて発表予定である。

また、2つ目の研究として、被援助者のソース記憶に関する研究を行った。向社会行動の始発には、援助を求める人に対する認知が必要であり、もし、そのような認知過程がヒトに見られるとすれば、援助を求めている人の顔が特に記憶されやすい可能性がある。そこで、この点を明らかにするための実験を行った。裏切り行動や卑怯な行動を取った人物は、

顔の再認成績ではなく、そのような人物である（例．裏切り者）というソース記憶成績が高まるという知見（Buchner, Bell, Mehl, & Musch, 2009）を参考に、ソース記憶実験を行った。実験では、援助が必要な状況の文章または援助が必要でない状況の文章を顔と対提示し、援助の必要度を評定するよう求めた。その後、顔に対する再認とソース判断を求めた。さらに、これらの記憶過程に感情が与える影響を調べるため、ネガティブ気分状態に誘導した場合でも検討を行った。しかしながら、実験の結果、顔の再認及びソース判断に対提示した状況文の違いによる差は見られなかった。また、気分状態による影響も認められなかった。このように、援助を求める人の顔が特に記憶されやすいわけではなかったが、一連の実験においては、顔の再認成績が著しく低い参加者が一定数見られたことが、効果の検出を阻害した可能性がある。よって、より記憶成績が高くなる手続きを用いることで、引き続き、この点について検討していく予定である。

3つ目の研究として、感情情報の評価に忘却が与える影響についても検討した。これまでの研究から、注意や反応を抑制した顔はその魅力度や信頼性が低下することが明らかにされている（e.g., Frischen, Ferrey, Burt, Pistchik, & Fenske, 2012; Doallo, Raymond, Shapiro, Kiss, Eimer, & Nobre, 2012）。また、自然忘却においても忘却した単語の価値や顔の魅力度が低下するという類似した効果が見られている（e.g., Castel, Rhodes, McCabe, Soderstrom, & Loaiza, 2012; Kobayashi & Kawaguchi, 2016）。これらの知見を元に、本研究では、自然忘却によってネガティブ画像のネガティブさが低減するかどうかを調べた。実験では、手がかりとターゲットからなる画像ペアの学習を求めた。この時、手がかりにはターゲットと関連するニュートラル画像、ターゲットにはネガティブ画像を用いた。学習後、記憶テストを行った。また、学習前と記憶テスト後のそれぞれでネガティブ画像のネガティブさの評定を求めた。実験の結果、学習前のネガティブさが高い画像は忘却によってネガティブさが低下することが明らかになった。この結果は、信頼性や魅力度といったポジティブな評価だけでなく、ネガティブな評価についても忘却によって低減することを示している。今後は、この効果がポジティブ画像のポジティブさを対象とした場合に見られるか、気分状態がこの効果にどのように影響するのかを明らかにすることで、記憶と感情の相互作用を詳細に調べる必要がある。

4つ目の研究として、非喫煙者において、喫煙に対する潜在的態度を調べた。潜在的態度とは、社会的対象についての、意識できない、または、意識することが困難な態度を指す（Greenwald & Banaji, 1995）。これまでの研究から、非喫煙者は、受動喫煙への対処行動によって4つのステージに分類できることが示されている（大竹, 2014）。本研究では、非喫煙者において、これらのステージの違いによって喫煙に対する潜在的な回避・接近態度の違いが見られるか、そして喫煙防止動画が態度の変容を導くかどうかを調べた。受動喫煙への対処行動のステージ分類のうち、受動喫煙を最も容認している群（受動喫煙容認期群）と最も否定的な群（嫌煙高期群）の2群を対象とし、顕在的態度と潜在的態度を測定する実験を実施した。顕在的態度は喫煙風景に対する評定によって測定した。潜在的態度は、潜在連合テスト（Implicit Association Test; Greenwald, McGee, & Schwartz, 1998）の短縮版である Brief IAT（Sriram & Greenwald, 2009）を用いて測定した。さらに、顕在的態度と潜在的態度を測定した後、喫煙防止動画を視聴してもらった。動画視聴後に、再度、顕在的態度と潜在的態度の測定を行った。実験の結果、嫌煙高期群の方が受動喫煙容認期群よりも喫煙に対する顕在的態度はネガティブであった。また、両群ともに喫煙に対する回避的な潜在的態度が見られたが、その程度には群間差は見られなかった。また、両群とも喫煙防止動画の視聴によって、顕在的態度はよりネガティブに変化していたが、潜在的態度には変化は見られなかった。この結果は、受動喫煙容認期群は喫煙が回避すべきであるという理解はあるものの、顕在的に表出しにくく、受動喫煙への対処行動を取りにくいという特徴があることを示唆している。

以上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。